



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「遂行分析」と「話法」
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 26(1), 187-208
Issue Date	1977-12-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33414
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(1)_PL187-208.pdf



「遂行分析」と「話法」

葛 西 清 蔵

「遂行分析」と「話法」

葛 西 清 蔵

It has been suggested that 'performative analysis' by Ross be considered with reference to 'style indirect.' This paper studies the relation between these two and, after pointing out that 'performative analysis' is more closely related to 'mixed narration' than to 'style indirect libre,' concludes that 'performative analysis' is nothing but a part of 'indirect speech' and should be treated as such.

0. Ross の「遂行分析」(performative analysis) は、平叙文の最上節にも「遂行節」(performative clause) があるということを提案したもののだが、これは明白に「話法」(narration) と関係をもつように思われる。現に Halle は「遂行分析」は 'style indirect libre' (いわゆる「描出話法」(represented speech)) との関係において論じなければならない、と指摘している。⁽¹⁾ しかし具体的に扱ったものはまだ見られない。少稿は「遂行分析」と「話法」を比較し、「遂行分析」は「話法」(とくに「混合話法」(mixed narration) の範囲の中で、その一部として論じられるべきものである、ということを主張しようとするものである。

本稿の議論の都合上、つぎの順にしたがって論をすすめたい。

1. 「遂行分析」

2. 「話法」

3. 「遂行分析」と「話法」の比較

3. 1. 「遂行節」, 「伝達部」の主語の人称, 動詞の種類と時制, 間接目的語。

3. 2. 1 「遂行節」の '消去' (performative deletion) と「話法」

における「伝達動詞」(reporting verb)の省略。

3. 2. 2 その文体的効果について。

4. いくつかの具体例, まとめ。

1. 「遂行分析」について。

変形生成文法で疑問文, 命令文の生成には, はやく Katz and Postal (1964) で句構造規則にこれらの文を示す記号を導入し, これが疑問文, 命令文をつくる変形をおこす引き金になることは提案されていた。Ross は平叙文においてもこの種のものがあるとした。たとえば,

1. Prices slumped.

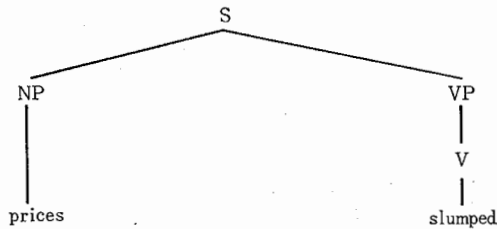


Fig. 1.

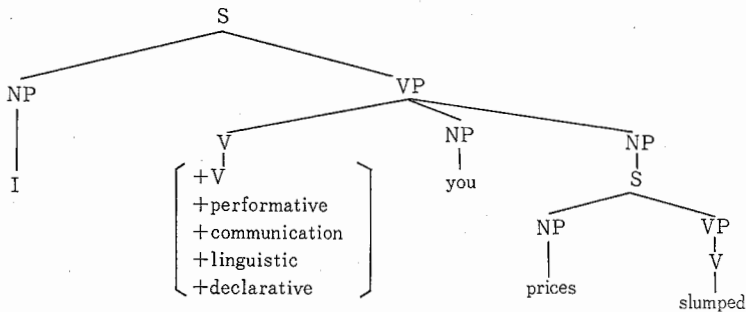


Fig. 2.

(1)の深層構造は Fig. 1. よりむしろ Fig. 2. のようなものであり, Fig. 2. の最上節が「遂行節」(performative clause) で, これが消去されて

(1)が生成されるとした。実はこういう考え方は J. Austin (1975) が、

2. a. Go!

b. I order you to go.

の二文において、これらの文はともに「遂行的」(performative)であるが、(2 b) では「遂行動詞」(performative verb) が ‘explicit’ (顕在的) であるのに対して (2 a) ではそれが ‘implicit’ (潜在的) である、といったところから大きな示唆をうけていることは明白である。しかしこの点については論旨に直接に関係ないのでここではこれ以上論じない。ただ「遂行節」そのものは本稿の重要な論点になるので、今少し詳しくふれておきたい。

Ross は「遂行節」の主語は ‘I’ であること、動詞は <+performative>, <+communication>, <+linguistic>, <+declarative> などの素性をもつものであること、間接目的語として ‘you’ があることを多数の例によって証明しようとした。

今、議論の必要上、その証明の一つをあげれば、まず、

3. a As for the students, they’re not going to sign.

b* As for $\begin{Bmatrix} \text{them} \\ \text{themselves} \end{Bmatrix}$, the students aren’t going to sign.

4. a As for her, she won’t be invited.

b* As for herself, she won’t be invited.

5. a Glinda knows that as for herself, she won’t be invited.

b* Maxwell knows that as for herself, she won’t be invited.

6. As for myself, I won’t be invited.

これらの各文から(6)の文が文法的であることは、(6)の文の前に ‘I’ を含む文の存在を予想せざるを得ない。また、

7. a Tom_i {
said
declared
asserted
shouted
whispered
told them
explained
wrote
cabled
wigwaged
? groaned
?? snorted
?? laughed
} that Ann could swim, but nobody
believed him_i.
- b Tom_i {
told them
spoke to them
talked to them
} about {
Ann's being able to swim.
Ann's ability to swim.
},
but nobody believed him_i.
8. a *Tom_i frowned his_i displeasure (smiled his_i encourage-
ment / shrugged his_i resignation / roared his_i amusement),
but nobody believed him_i.
- b* Tom_i {
knew
believed
felt
doubted
hoped
} that Ann could swim,
but nobody believed him_i

などの文から「遂行節」の動詞は <+communication>, <+linguistic>.
などの素性をもつものでなければならないと主張する。特に、ここでは
knew, believed, felt, などの動詞が除外されていることに注目しよう。
さらに「遂行節」に間接目的語として 'you' があると予想させる例
には、

9. a* You feel {
tired
bored
jaded
}.

b. I told Mr. Feuerstein_i that $\left\{ \begin{array}{c} \text{I} \\ \text{you} \\ *he_i \end{array} \right\}$ felt tired.

c. Blondie announced to Dagwood_i that $\left\{ \begin{array}{c} \text{I} \\ \text{you} \\ \text{they} \\ *he_i \end{array} \right\}$ felt bored.

b. Jerry told Joyce_i that $\left\{ \begin{array}{c} \text{Sam} \\ \text{Petrarca} \\ \text{we} \\ *she_i \end{array} \right\}$ felt jaded.

をあげ、これらの各文から（省略されたと思われる）一つ上の節には間接目的語として ‘you’ が存在する筈とした。

つぎに、この「遂行節」の消去についてであるが Ross 自身この点についてこの消去が義務的なのか任意的なのか明確な態度をとっているとは思われない。⁽²⁾ しかし実はこの消去変形が義務的なか任意的かということまたこの変形そのものは Ross の主張する「遂行分析」そのものの存在にかかわる重大な問題でもあるのである。

たとえば (10 a), (10 b) において、(10 b) から「遂行節」が消去されたと思われる (10 a) では全く真理値がちがうものになってしまう。(10 a) は真（又は偽）でありうるが (10 b) ではそういう判断が成立しないという ‘destructive dilemma’ (Stamp) を「遂行分析」はもつ。

10. a. Grass is blue.

b. I hereby say to you that the grass is blue.

このように、「遂行分析」の主張はそれとして、Ross の証明にもそれぞれ反例があり (Grewendorf) 消去についてだけでもかなり重要な問題を含んでいる。しかし少くとも christen とか

11. a. Jenny isn't here, for I didn't see her. (Ross).

b. Honestly, she stole the money. (Rutherford).

(11 a), (11 b) のような「遂行節的」な事実がある以上、この種の分析を無視するわけにはいかない。問題は「遂行分析」が、主張されているように一般的な形で提出できるものであるのか、⁽⁸⁾ McCawley のいうように ‘say’, ‘tell’ など具体的ないくつかの語だけにあてはまる ‘minor rule’ にすぎないものなのか、ということである。

2. 「話法」とくに ‘style indirect libre’ いわゆる「描出話法」(represented speech) について。他人(又は自分)が言った(考えた)ことを伝えたいと思うときには二つの方法があり、一つは話し手の言葉をそのまま述べる「直接話法」(direct speech), もう一つは、その言葉を話者の言葉に一度なおして述べる「間接話法」(indirect speech) である。「間接話法」を Jespersen はさらに「一般にすぐ前の動詞、たとえば he said [thought, hoped, & c] あるいは he asked ... に従属するもの」と「従属話法」(dependent speech) (いわゆる「間接話法」), とし、このような「関係が通例文脈結合から理解される」ものを「描出話法」といい、二種に分類した。

12. Before Randorf left her that summer a letter arrived from Sam to inform her that he had been unexpectedly fortunate in obtaining the shop. *He was in possession ; it was the largest in the town, combining fruit with vegetables, and he thought it would form a home worthy even of her some day. Might he not run up to town to see her ?*—Hardy.

この下線が「描出話法」であるが、疑問文などの語順、疑問符などは「直接話法」的であり、代名詞の人称・動詞の時制・副詞などが「間接話法」的であること、さらに「伝達動詞 (reporting verb) が欠けて

いるところに大きな特徴がある。「直・間接話法」両方の性質をもっているという点では「中間 (intermediate) 話法」, 「混合 (mixed) 話法」ということも出来る。「伝達動詞」をはぶき「あたかも外界のできごとの直接の継続であるかのごとく」伝達することによって生ずる「生き生き」した効果は小説家のよく目指すところである。

しかしこのような効果をもつ「中間話法」は上にみた「描出話法」だけにみられるものではない。つぎの例をみよう。

13. a. *I could go without sleeping, he told himself. But it would be too dangerous.* —Hemingway.
b. *If the boy were here he could rub it for me and loosen it down from the forearm, he thought. But it will loosen up.*—ibid.
c. *What could I buy with it? he asked himself. Could I buy it with a lost harpoon and a broken knife and two bad hands?*—ibid.

この各文の下線部は伝達される部分をそのまま表わした文（これを「地の文」とする）から引用符をとり去ったものである。さらにここでは「伝達節」（以下「伝達動詞」を含む節をこうよぶことにする）がついているのは最初だけであり、次の「地の文」にはそれがすべて省略されていることに注目しておこう。（このことは実は重要な意味をもつので後にふれることにする）。

さらに「話法」の「中間的」なものとしては、この他に「混合」の度合によっていくつかの場合を考えることができる⁽⁴⁾ が論旨に直接関係すると思われないのでこれ以上ふれない。

3. 「遂行分析」と「話法」を比較しようとするとき、すでに見たとこ

ろから予想される比較の対象は「地の文」よりむしろ「遂行節」と「伝達節」であろう。さらに具体的に問題になる点を指摘すれば、

- ・「遂行節」、「伝達節」の主語の人称、動詞の種類と時制、間接目的語。
- ・「遂行節」、「伝達節」の消去。

のそれぞれが「遂行分析」と「語法」の比較の焦点ということになる。以下一つ一つここれらを検討していくことにする。

3. 1. 1 まず「地の文」を直接のべる主語の人称について。すでにみたように「遂行節」（これが「伝達節」とどういう関係にあるかは後に明らかになるので、今は「地の文」という用語を「遂行分析」に使うわけにはいかないが）の主語は常に‘I’でなければならない。しかし「語法」の場合は「伝達動詞」との結合に不都合のないものである限りあらゆるものが主語になることができる。

14. a. I say, “I am happy.”
- b. You say, “you must rest.”
- c. He says, “she is glad.”
- d. They say, “We are to go on an excursion.”
- e. James says to Henry, “I am wrong.”

つまり「伝達節」の主語になるものには特別な制限がない。

3. 1. 2 「遂行節」における動詞は、聴者に言葉によって伝達する動詞、つまり〈+communication〉、〈+linguistic〉、〈+declarative〉などの素性をもつものでなくてはならない。したがって（便宜的に必要な個

所をくり返すと)

15. a. ? groan ?? snort ?? laugh
b. *know *believe *feel *doubt *hope
c. *frown one's displeasure, *smile one's encouragement
*shrug one's resignation

である。しかるに「話法」における「伝達動詞」は、

16. a. announce, answer, ask, cry, inquire, murmur, remark,
reply, say, state, tell, think, whisper
b. add, begin, continue, correct, go on, grin, interrupt, observe, repeat, return, smile⁽⁵⁾

(16 a) は聴者を予想する「伝達動詞」である（ただ伝達的でない‘think’が入っていることが重要な意味をもつので注目しておこう）。しかし(16 b) は伝達に関連する動作を表わすものである。‘think’をのぞけば(16 a) は「遂行節」の動詞に類するものである。

3. 1. 3 Ross によると「遂行節」の動詞は叙実的 (<+declarative>, したがって <-declarative> な ‘enquire,’ ‘ask,’ ‘command,’ ‘order’ などのぞかれる) で現在時制でなければならない。しかし「話法」では、

17. a. He says, “The train will be late.”
b. He said, “Ann will be in Paris on Monday.”
c. I should perhaps remind you what is the object of this journey.
d. Casca will tell us what the matter is. —Shakespeare.

というように「伝達動詞」の時制は現在には限らない。

3. 1. 4 「遂行節」には間接目的語として ‘you’ が必要だが「話法」では 3. 1. 1 でみたように主語に相応した多様な目的語をとりうる。また必ずしも伝達的でない動詞もあることから間接目的語があらわれなかったり省略されていることも多い。

18. a. James says to Henry, “You are wrong.”
- b. He said to me, “Honesty is the best policy.”
- c. Casca will tell us what the matter is. (= (17d))
- b. He said to them all, “Good-bye, my friends!”

以上のように「遂行節」と、「話法」の「伝達節」における主語、動詞の種類・時制、間接目的語を比較してみるとつぎのような予想をたてることができるように思われる。

19. 「遂行節」は「話法」における「伝達節」の中に含まれうるものと考えられ、その特殊な場合にすぎないのではないか。

この予想の正当性は、次にみる「遂行節」の消去と「話法」の「伝達節」の省略との関係をみるとさらに明らかになるように思われる。

3. 3. 1 「遂行節」消去 (performative deletion) と「話法」における「伝達節」省略。

Ross は (20) のような規則によって「遂行節」を消去し (21 a),

$$\begin{array}{rcl}
 20. & [I]_{NP} \left[\begin{array}{l} +V \\ +performative \\ +communication \\ +linguistic \\ +declarative \end{array} \right] & [you]_{NP} S_{NP} \\
 & \begin{array}{cccc} 1 & 2 & 3 & 4 \end{array} & \Rightarrow \\
 & \begin{array}{cccc} 0 & 0 & 0 & 4 \end{array} &
 \end{array}$$

(21 b) の関係を説明する。

21. a. Prices slumped. (= (1))

b. I tell you that prices slumped.

22. Before Randolph left her that summer a letter arrived from Sam to inform her that he had been unexpectedly fortunate in obtaining the shop. *He was in possession; it was the largest in the town, ...* (= (12))

23. I must get him alongside this time, he thought. *I am not good for many more turns.* Yes, you are, he told himself. *you're good for ever.* — Hemingway.

(22) は典型的な「描出話法」の文であり、下線部は「地の文」であって、人称・時制は「間接話法」的でありながら、「伝達節」がないところにその特徴がある。また (23) では (22) とはちがい「地の文」は「直接話法」の時のそのままであるが (22) とおなじく「伝達節」が欠けている。このことは重要なことを意味している。つまり「遂行節」消去をした (21 a) は Ross のいうように「描出話法」の文 (22) より、それとはかなり性格が違う (23) のような「地の文」の時制も人称も予想される)「伝達節」の影響をうけていない「混合話法」の方にはるかに類似したものである、ということである。

Austin (p. 62) にしたがえば、‘I’ 以外の主語を含むもの (14. b, c, d, e), 動詞が「伝達の」でないもの、その時制が現在ではないもの (17. b, c, d) は ‘constative’ (Searle では ‘describe’ したもの) であり、‘performative’ (「遂行的」) なものと区別される。もっとも Austin 自身があげる ‘christen’, ‘promise’ ... のように典型的に「遂行的」と思われる例もある。しかし、これには、‘promise’ を含む文でありながら、

24. a. If you don't hand in your paper on time, *I promise you*
I will give you a failing grade in the course. (Searle).
b. "You stole that money, didn't you?" "No, I didn't
I promise you I didn't." (ibid.)
25. a. I'll do it for you. (Searle)
b. without fail
c. as God is my witness (Stampe)

(24 a) のように '警告' (warning) を表わしている (Stampe) もの、
(24 b) のように否定を強調しているにすぎず、いずれも '約束' して
いるとは考えられないものがある。また逆に (25 a, b, c) のように、
'promise' を使わずに '責務' (obligation) を負うことを示しうる場合
もある。したがって 'promise' を「遂行的」と他の動詞から区別するの
は必ずしも説得力をもつとは思われない。'promise' が '約束' という
'force' をもつのは、C. O. D. に 'promise (assure)' とあり 'assure'
が 'tell (person) confidently ...' とパラフレーズされているように、
話者が伝えようとする「内容の文」を 'confidently' に言っている、と
記述 ('describe') しているところから生ずるものであろう。3. 2. 2 を
参照。その方が (24 a, b) の説明にもあてはまる。こういう観点からも
'performative,' 'constative' の区別 (は Austin 自身認めるように必ず
しもはっきりしたものではないが) は少なくとも対立的にみられるべきも
のであるよりはむしろ、前者は後者に含まれるべきものでその特別な一
部として扱われるべきものであることがわかる。これは「遂行節」と
「話法」の「伝達節」との比較から生れたいわば 'bonus' である。こ
れらのいくつかの点からしても、主語が 'I', 動詞が伝達的で叙実的、
現在時制、間接目的語を含むものだけを特に「遂行節」として他から区
別すべき何らの積極的な理由はない。⁽⁶⁾

3. 2. 2 つぎに「遂行節」の消去, 「伝達節」の省略のもつ文体上の意味について考えてみたい。

まず, 「遂行分析」における「遂行節」消去のもつ意味からみていく。

すでにみたように Ross は必ずしも「遂行節」の消去について明確だとは思えない。(26 a), (26 b) (便宜上くり返す) において, 真理価値

26. a. Grass is blue. (= (10 a))

b. I hereby say to you that the grass is blue. (= (10 b))

がちがうことはすでにのべた。(26 a) は伝えようとする内容の文をそのままの形で提示したものであるに対し, (26 b) ではその文が I hereby say to you という「遂行節」に従属し, 共義的になってしまっている。(26 b) の「遂行節」は (26 a) のような伝えようとする内容の文に対して話者 'I' の立場から客観的に記述した, いわば話者の態度をつけ足し内容を確認したものである。これは,

27. a. I'll come.

b. I hereby say to you that I'll come.

においてもおなじである。(27 a) では 'I'll come' 以上のことを言っているわけではなく必ずしも '約束' にならないが (27 b) では 'I hereby say to you' を付すことによって言っている内容をはっきりと確認しており, 結果的には '約束' したのとおなじ 'force' をもつ ('by saying what he says he PROMISES that he will come': Stampe) のである。

このように「遂行節」のある文とない文では, 前者が内容を確認するという話者の態度をも表わすのに対し, 後者では伝えるべき内容の文をなまのまま提示したもの, という大きな違いをみることができる。

つぎに「描出話法」について。

この「話法」の特徴は「地の文」の人称、動詞の時制等が「間接話法」的であるのに「伝達節」が欠けている、ということである。これがしばしば「意識の流れ」(stream of consciousness)⁽⁷⁾と関連させて言及されるのは、「伝達節」の省略によって、いきなり「地の文」が提示されるため「一方では作者(話者)が物語の人物及言行に対して冷かな第三者としての立場を離れることなしにそれを叙すると同時に他方に於ては作中の人物の身になり、其の人物の思惟感情等を己れのそれとしてと言うよりも其の人になり代って叙べる方法(大塚)」であるからに他ならない。⁽⁸⁾

しかし、この「描出話法」のもつような中間的な話法による文体的な効果は、「地の文」の人称、動詞の時制もかえないで、そのまま提示する次のような「混合時制」の場合であろう。

28. I must get him alongside this time, he thought. *I am not good for many more turns.* Yes, you are, he told himself. *you're good for ever.* (=(23))

この下線の文は、人称・動詞の時制も「伝達節」に影響されておらず、「混合話法」のうちでも「地の文」をそのまま伝えており、最も「直接話法」に近いものである。しかも「伝達節」を省略することにより、第三者として客観的に記述したという立場からはなれ「地の文」が発されている場面におかれることになる。すなわち、話者は、「地の文」を発している者とおなじ立場をわけあうことになる。

「遂行分析」における「遂行節」消去、「話法」における「伝達節」の省略は、ともに伝えようとする内容の文を生のまま提示することにより、読者を「話者」とおなじ場面とわけあい、両者を一体化してしまうという効果をもつことは明白である。「遂行節」が「消去」されたとい

「遂行分析」と「話法」

う時、それは現実の発話では、「話者」がまさに‘I’であり、発話することが‘tell’, ‘say’であり、聴者が‘you’であるからに他ならない。

以上どの点から考えても「遂行分析」を「話法」と切りはなして、特別なものとして扱う理由がないことは明らかなと思われる。

4. 今までいくつかの側面から「遂行分析」と「話法」の類似点を指摘してきた。ここではこの類似点を示すと思われる具体例を Hemingway の *The Old Man and the Sea* からとりあげ、小稿のまとめとしたい。

Ohman は Hemingway の小説には ‘style indirect libre’ にかかわる変形に依存している部分があるとして、次の三つの変形をあげている。

- GT ; quotation, or reported thought.

He	$\left. \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{said} \\ \text{felt} \\ \text{etc.} \end{array} \right\}$	NP abst	$\left. \right\} \rightarrow \text{He thought, "She has made me lie."}$
She has made me lie			

- Indirect discourse (change of pronouns and of verb tense)

He thought, "She has made me lie." →
He thought that she had him lie.

- Deletion

He thought that she had made him lie. →
She had made him lie.

これは「描出話法」一般の説明としてはあてはまるが、*The Old Man and the Sea* に関するかぎり、上のような説明は正しくない。この小説に出てくるのは上のようなものではなくてむしろ (Ohman にならって表わせば) 次のようなものである。

• Quotation

He $\left\{ \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{said} \end{array} \right\}$ NP
 I can always come in on the low from Havana } →
 He $\left\{ \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{said} \end{array} \right\}$ "I can always come in on the low from
 Havana."

• Quote deletion

He $\left\{ \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{said} \end{array} \right\}$, "I can always come in on the low from
 Havana." →
 He $\left\{ \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{*said} \end{array} \right\}$, I can always come in on the low from
 Havana.

• Reporting clause deletion

I can always come in the low from Havana.

しかし実はこれでは不充分である。「伝達動詞」が 'say' のときには
 Quote deletion はなくいきなり Reporting clause deletion をした形に
 なる。

29. a. "It was only his turn," he said. "He'll take it."
- b. "He's taken it," he said. "Now, I'll let him eat it."
- c. "Come on," the old man said aloud. "Make another
 turn. Just smell them"

「伝達節」が消去されるという点では 'say,' も 'think' もおなじだ
 が引用符の消去では両者ははっきり区別されて使われている。

すでに「伝達動詞」の種類についてのべた時にも、伝達的な性質をもたない‘think,’‘feel’なども普通含まれることに注目した。しかし一般になぜ性質を異にするこれらの動詞が「伝達動詞」に含まれるのかについて論じられることは少ない。大塚が「直接話法」に二種類を認め「口に実際上った言葉」の場合を pure direct speech, 「作者が作中の人物の心言を想像し、恰も心中に於てかかる言葉を発したかの如く、言い換へれば若し口に出して言ったならばかくも言ったであろうと想像する」ところのものを imaginary direct speech で、この場合の「伝達動詞」は‘think,’‘feel’である、とした。しかし問題なのは「表現の形式であって…実際声に出して言ったか否かは当面問題にはさまず重要なことではない」から両者をおなじように「直接話法」として扱って差支えない、という。おなじことを裏から言うに “... but ‘speech’ must be allowed to include unspoken mental activity when the reporting verb may be *think, believe, feel* etc;” (Quirk et al.) ということになる。

それではこの二種の‘say,’‘think,’が具体的にどのようにして関連されているであろうか。

30. “What was that? What were you muttering about?”

“Nothing at all. Just *thinking aloud*.” (Bates)

31. think aloud: utter one's thought as they occur (C.O. D.)

にみるような‘think aloud’を一つの手がかりにして説明できるように思われる。*The Old Man and the Sea* にも次のような個所がある。

32. It was considered a virtue not to talk unnecessarily at sea and the old man had always considered it so and respected it. But now *he said his thoughts aloud* many times since there was no one that they could annoy.

また次のような例も参考になる。

32. a. I could go without sleeping, *he told himself*. But it would be dangerous.
b. Don't think, old men, *he said to himself*. Rest gently now against the wood and think of nothing.

ここで注目されることは、この小説の中では 'think aloud' は (say to (tall) oneself) であり、しかも 'say to (tell) oneself' は、引用符の消去のされ方が 'think' の場合と全くおなじだ、ということである。次の例はこの間のことをよく説明する。

33. What could buy with it? *he asked himself*. Could I buy it with a lost harpoon and broken knife and two bad hands? 'you might,' *he said*. 'You tried to buy it with eighty-four days at sea. They nearly sold it to you too.'
I must not think nonsense, *thought*. Luck is a thing that comes in many forms....

「地の文」の人称・動詞の時制などは「直接語法」の時のままであり、しかも 'say to (tell) oneself,' 'think' を含む「伝達節」を省略するという方法をくり返す⁽⁹⁾ ことによって話者と話をを一体化しようということは明白で、これは Hemingway が意識的に使った方法であった (Hotchner)。⁽¹⁰⁾ これをたんに 'style indirect libre' だけで説明しようとするものの不正確・不充足さは明白である。

「遂行分析」における「遂行節」の消去により、伝えようとする内容の文が、記述の文としてではなく生のまま読者に提示されることになる。それは「遂行節」の主語 'I', 伝達的な現在時制の動詞、間接目的

「遂行分析」と「話法」

語 ‘you’, つまり ‘I say to (tell) you’ が「話者」「I」と「きき手」‘you’, の間で「今」発話が交されているから、という全く「実用論」的な理由から不必要であるから付いていないという当然の結果にすぎない。以上どの点から考えても「遂行節」だけを「話法」から区別する特別の理由はない。

notes

- (1) Ohman, p. 124. p. 125. fn. Ross, p. 268 n. 38.
- (2) たとえば Rutherford (1970)。このことについて Ross が McCawley を誤解していると思われる点については葛西 (1977)。
- (3) 「遂行分析」が Ross のような一般的なものでないこと、再定義されるべきものであることについては葛西 (1977)。
- (4) 『現代英語学辞典』「narration」の項を参照。
- (5) 『現代英語学辞典』には ‘feel,’ ‘notice’ などが入っていないが、これらを入れてよい。
- (6) Palmer p. 142 “Sentences beginning with *I state ..., I ask ..., I order ...* are reports of statements, questions and commands and are rightly seen in the traditional grammar books as indirect statements, questions and commands; they are derived from the direct ones and not vice versa. Secondly, it is abundantly clear that the meaning is not the same. ...”
- (7) Bryant p. 247.
Ross, note 38 “...I would suppose this rule to be responsible for the well-known phenomenon of stream-of-consciousness prose (or *discours indirect libre*), ...”
- (8) Curme. “In a lively style, the author often strips off all formal signs of subordination and reproduces the thoughts, feelings, dreams, impressions, fears, etc., of another in grammatically independent form. The words are not represented as a free report of the author or speaker, but as a close, though indirect, reproduction of the thoughts, musings, reveries, etc., of another.”
- (9) ‘say’ から ‘think’, さらにそれさえも省略されることの指摘とその文体的な意味については葛西 (1970)。
- (10) Hotchner は Hemingway の文体について ‘what he saw and heard and experienced he wrote about in a way that made the reader feel himself a part of it’ といっている。また Hemingway 自身のことばとして ‘all good

books have one thing in common," he once said, "after you've read one of them you will feel that it all happened, happened to you, and that it belongs to you for ever; the happiness and unhappiness, good and evil, ecstasy and sorrow. If you can give that to the reader, then you're a writer." といっている。

references

- Austin, J (1975) *How to do things with words*. Oxford.
- Bach, E. & R. T. Harms (1968) *Universals in Linguistic Theory* Holt, Rinehart and Winston. Inc.
- Bates, H. C. 'The Picnic' *The Courtship and Other Stories*.
- Bryant, M. M. (1971) *A Functional English Grammar* Kenkyusha, Tokyo.
- Cole, P. & J. L. Morgan (1975) *Speech Acts* Academic Press.
- Curme, G.O. (1963) *Syntax* Maruzen, Tokyo.
- Hotchner, A. E. (1969) 'I remember "Papa" Hemingway' *The Study of Current English*.
- 石橋他編 (1973) 『現代英語学辞典』成美堂 東京。
- Jacobs, R. A. & P. S. Rosenbaum (1970) *Readings in English Transformational Grammar* Ginn and Company.
- Jespersen, O. (1951) *The Philosophy of Grammar* George Allen & Uuwin Ltd.
- 葛西清蔵 (1970) 「人称・時制にみる「私的言語」の一面」『函館英文学』IX
- (1977) 「「遂行消去」について」『北海道大学文学部紀要』25-2
- Katz, J. J. & P. M. Postal (1964) *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions* The M. I. T. Press.
- Lester, M. (1973) *Readings in Applied Transformational Grammar* Holt Rinehart and Winston, Inc.
- McCawley, T. D. 'The role of semantics in a grammar' in Bach & Harms.
- Ohman, R. 'Generative Grammars and the Concept of Literary style' in Lester, M.
- 大塚高信 (1948) 'Represented Speech' 『英文法論考』研究社, 東京。
- Palmer, T. R. (1976) *Semantics* Cambridge Univ. Press.
- Quirk, R. & S. Rosenbaum (1973) *A University Grammar of English*. Longman.
- Ross, J.R. (1970) 'On declarative sentences' in Jacobs & Rosenbaum
- Searle, J. R. (1970) *Speech Acts* Cambridge Univ Press.
- Stampe, D. W. "Meaning and truth in the theory of speech acts" in Cole and Morgan.